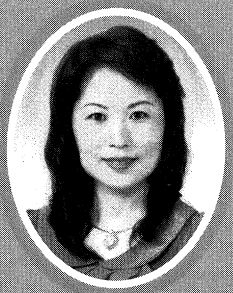
オアシス

「魔女」と「賢女」と「魔法使い」

―グリム童話を考える④―

大野寿子



「魔女」と聞くとみなさんはどんなイメージを思い浮かべるだろうか。「魔女像の比較文化研究」をテーマとした、東洋大学日本文学文化学科第一部の筆者担当講義「ドイツ語圏文学文化と日本B」の二〇〇八年度初回授業時に（二〇〇八年一〇月一日水曜三限）、「魔女について思い描くものを一〇個挙げよ」というアンケート調査を実施した。[1] できるだけ文章ではなく簡潔なキーワードでという指示のもと、受講生二三六名（男子四九名、女子一八七名）より得た回答のイメージ総数は、二一三九個であった。その中で最も多い回答が、「ほうき」（一六〇名）であり、空を飛ぶ道具という認識が強かった。次に多かったのが、「魔法」（九八名）であり、「杖」（七九名）、「黒い服」（六九名）、「黒」（六八名）と続く結果となった。[2] ただし、「黒」も「黒い服」も表現方法に差が出ただけで、「黒」というイメージに総括しうると見なせば、「黒い〔服〕」は一三七名となり、「ほうき」に継ぐ多数意見となる。みなさんの「魔女」のイメージとは合致しただろうか。

ところでこのような魔女のイメージ・ソースとしては、宮崎駿アニメ『魔女の宅急便』や、J. K. ローリング『ハリーポッター』シリーズが多く挙げられたのだが、「白雪姫」や「ヘンゼルとグレーテル」等の『グリム童話』も決して少なくはなかった。[3] では、『グリム童話』における「魔女」は、どのように描かれているのだろうか。

＊　＊　＊

グリム兄弟が収集刊行した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(Kinder- und Hausmärchen,『グリム童話』あるいはKHMと略記）の第七版には、「メルヒェン」というジャンルで二〇一話（通し番号は二〇〇番まで）、「子どものための聖人伝」というジャンルで一〇話が収録されている。[4] その中で、「魔女」（原

語ドイツ語ではHexe（ヘクセ）という語が登場する話は二〇話ある。[5] たとえば、KHM1「カエルの王様、あるいは鉄のハインリヒ」では、王女の手により壁に投げつけられたカエルが美しく優しい王子の姿に戻ると、「悪い魔女（Hexe）に魔法にかけられていた」と自分の身の上を語る。また、KHM15「ヘンゼルとグレーテル」では、森をさまよいたどり着いた「パンの家[6]」をかじるヘンゼルとグレーテルの眼前に、「ふいに（家の）扉が開き、石ほどに年をとったおばあさん[7]が、杖にすがってそろりそろりと出てきた」という描写がある。「頭をがくがくさせ」ながら、二人に泊まっていくように薦めるこの女性が、「うわべは優しそうにしているだけ」の、「本当は悪い魔女（Hexe）」だったというのである。それから、次のように続く。

子ども達が自分の手中に落ちると、殺して、料理して食べてしまう。そんな日は、魔女のお祝いの日だった。魔女達は赤い目をしていて目が悪い。しかし、動物のように鼻が利くので、人間が近づくと匂いでわかるのである。

「魔女」に、怖い悪者のイメージが付随しているようである。このような「悪い」魔女像の元となったものに、ヨーロッパに長く続いた「魔女狩り」における、「魔女は悪魔と通じている」という定義の一つを挙げることは不可能ではない。ところで、「ヘンゼルとグレーテル」の「魔女」に施された「悪い」という形容詞は、グリム兄弟（多くは弟ヴィルヘルム）が校正あるいは改版過程において付け加えたことばの一つであり、初版前のエーレンベルク稿には存在しない。また、子ども達を捨てようと提案する「継母」は、第三版までは「実母」だった。他にも、上述のKHM1「カエルの王様」の王子がカエルになった理由が、「悪い魔女」によるものとなったのも、第四版以降であり、第三版までは「魔女」のせいにもされていない。このようなことを勘案すると、「魔女」とは、『グリム童話』改版改変において顕著となった、女性という存在の善と悪への二極化のなかで、歴史的なイメージもあいまって、悪のイメージをより濃厚に担った可能性がある。

ところで、「魔女」Hexeという語が登場する話は、「カエルの王さま」、「ヘンゼルとグレーテル」以外は次のとおりである。KHM11「兄妹」、KHM22「なぞ」、KHM27「ブレーメンの音楽隊」、KHM43「トルーデおばさん」、KHM49「六羽のハクチョウ」、KHM51「めっけ鳥」、KHM56「恋人ローラント」、KHM60「二人兄弟」、KHM65「千枚皮」、KHM85「金の子ども」、KHM116「青い灯り」、KHM122「キャベツロバ」、KHM123「森の中のおばあさん」、KHM127「鉄のストーブ」、KHM135「白い花嫁と黒い花嫁」、KHM169「森の家」、【KHM179「泉の側のガチョウ番の娘」】、KHM193「太鼓たたき」。この中にKHM53「白雪姫」が入っていないことにお気づきだろうか。『グリム童話』（絵本も含む）の和訳の際に、一般的に「魔女」という訳語が施

されている単語は、実はHexeだけではないのである。

＊　＊　＊

『グリム童話』において「魔法等の不思議な力に携わる者」は、「魔女」Hexeの他にも存在している。まず、Hexenmeister（ヘクセンマイスター）なるものが登場する話が五話ある。単語の上では「男の魔女」と考えると厳密なのだが、日本語としては矛盾しているので、よく「魔法使い」と訳される傾向にある語である（KHM46「フィッチャーの鳥」等）。さらに、「魔女術（Hexenkunst（ヘクセンクンスト））を使う者」が二話（KHM141「小さなヒツジと小さなサカナ」等）、「女の魔術師」Zauberin（ツァウベリン）が四話（KHM12「ラプンツェル」等）、「男の魔術師」Zauberer（ツァウベラー）が四話（KHM88「歌いながら跳ねるヒバリ」等）、「魔術（Zauber）を使う者」が三話（KHM57「金の鳥」等）、「賢女」weise Frau（ヴァイゼ フラウ）が八話（KHM50「いばら姫」等）に登場する。このように、原語のドイツ語テキストでは、魔法に携わる存在を示す語がHexeも含んで七種類、実は厳密に使い分けられているのである。少なくとも、「魔女術」Hexenkunstを使うグループと、「魔術」Zauberを使うグループとが存在していることに気づくことは重要である。野口芳子氏によれば、「魔女」Hexeは、処罰されたり悲惨な死を遂げたりするが、「女の魔術師」Zauberinや「賢女」weise Frauは、話のなかで主人公に苦難を与えたりはするが、処罰されはしないという。言語学者でもあり文学者、歴史学者、法学者でもあったグリム兄弟が、ことばの使い方に細心の注意を払っているという事実を知らない人達の手による、『グリム童話』の一般的な翻訳においては、HexeもZauberinも「魔女」と訳されることが多く、せっかくの『グリム童話』の仕掛けが見えてこないのは残念だ。

実は、KHM53「白雪姫」に登場する、あの「鏡よ、鏡よ」とつぶやく女性は、厳密には「魔女術（Hexenkunst）を使う者」と記されている。「魔女術を使う者」だから「魔女」だと見なせるのかもしれないが、ならばグリム兄弟は、なぜ「魔女」Hexeと記さなかったのか。グリム兄弟（特にヤーコプ）が著名な言語学者であることを勘案すれば、単なる気まぐれと見なすのは早計であろう。ちなみに、白雪姫の「継母」であり、櫛、組み紐、毒リンゴの三つの道具を使って彼女を殺そうとするこの「魔女術を使う者」は、『グリム童話』第一版までは「実母」であった。もしかしたらこのような、血が繋がっているにしろいないにしろ、被害にあう主人公と近親関係にあるという人物関係が、「魔女」Hexeとは言い切れない要因の一つなのかもしれないが、この点は残念ながらまだ推測の域を出ない。

＊　＊　＊

KHM12「ラプンツェル」において、妊娠中の女性に、いずれ彼女に生まれてくる子と引き換えに、庭のラプンツェル（サラダ菜）を食べさせる「女魔術師」Zauberinもまた、翻訳者によっては「魔女」と訳されることの多い存在である。この「女魔術師」は、生まれた女の子ラプンツェルを貰い受け、森の中の

高い塔に閉じ込める。まるで人さらいのような悪者にも思われがちだが、もともとはその母親が妊娠中に隣のラプンツェル（サラダ菜）を猛烈にほしがり、父親が盗みに入った結果の取引であった。また、高い塔に閉じ込められた女の子ラプンツェルは、「女魔術師」の目を盗んで王子を塔に招き入れ、恐らくは妊娠してしまったため、荒野へと追い出されることとなる。このような「女魔術師」の行為も残酷だと思われがちだが、もともと禁を犯したのはラプンツェルの方であることを忘れてはならない。さらに塔に閉じ込めるという行為を、たとえば「保護する」と解釈すれば、この「女魔術師」には悪者の要素が見当たらなくなってしまう。この高い塔の原型が、かつて、初潮を迎える破瓜期の少女を閉じ込めた高い塔の、通過儀礼的な役割にあるという民俗学的研究も存在する。このことから、この「ラプンツェル」における子どもを閉じ込める「女魔術師」と、先の「ヘンゼルとグレーテル」における子どもを食べようとする「魔女」との間には、役割上の微妙な相違があるともいえるだろう。

KHM50「いばら姫」において、王妃に女の子（後のいばら姫）が生まれたときに、祝福を授けるだけでなく、死という呪いを解くためとはいえ、一〇〇年の眠りを与える不思議な力を持った女性達もまた、「魔女」と誤解されがちの存在である。彼女達は「賢女」weise Frau という存在であり、グリム兄弟は彼女達を、北欧・ゲルマン神話における三人の運命の女神ノルンの末裔と考えていたようである。和訳の際には、「仙女」、「神通力を持った女」等と訳されることもある。運命を司る存在であれば、生命だけでなく、死あるいは死のような一〇〇年の眠りを幼子に与えることも、また結果的に運命の伴侶を導くこともできるであろう。

＊　＊　＊

ところで、上述の「魔女」Hexe の登場する話を挙げた際に、KHM179「泉の側のガチョウ番の娘」だけ【 】括弧つきだったのには意味がある。この話は、「賢女」が登場する八話のなかにも実は含まれている。ただし、そのときの「魔女」と「賢女」は同一人物を指している。つまり、村人からは「魔女」と見なされ、怖がられ、避けられていた老女が、実は「賢女」であったという話の展開なのであり、ここに、「魔女狩り」という負の歴史の中にも表される、誤解や偏見の恐ろしさを見て取ることもできるのではないか。

最後に、『グリム童話』には、「ほうき」に乗って空を飛ぶ「魔女」は登場しない。また、魔女の衣装が「黒」と記されている話もない。実は、ドイツにおける「魔女」のイメージには、黒い衣装を着ている表象も確かにあるにはあるが、それと同じくらい頻繁に、継ぎはぎだらけのマントや頭巾を身につけていることがあることを付言しておく。

注

(1)　同テーマの授業は二〇〇九年度以降、文学部日本文学文化

学科第二部の「比較文学文化特講B」へと移行した。

(2) 回答してくれた受講生には、この場を借りて御礼申し上げる。なお、当該アンケートの回答一覧は、大野寿子「現代日本における「魔女」像を考える〔研究チーム報告⑤「〈魔女〉の系譜—日本における漢文化と西洋文化の融合のメカニズム—」〕、東洋大学人間科学総合研究所編「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第一一号（二〇〇九年）、一二二—一三二頁に掲載されている。

(3) 「シンデレラ」も多い回答の一つであったが、ディズニー映画「シンデレラ」の影響が強いと思われること、さらにその原作はグリム童話の「灰かぶり（シンデレラ）」ではなく、ペローの「サンドリヨンあるいはガラスの靴」であることからここでは割愛し、別所で述べることにする。ちなみに、「シンデレラ」に登場する、ドレス等をプレゼントするあの女性は、厳密にいえば「魔女」ではない。

(4) 第一巻第一版が一八一二年、第二巻第一版が一八一五年に刊行され、グリム兄弟の生前に、第三版（一八三七年）、第四版（一八四〇年）、第五版（一八四三年）、第六版（一八五〇年）、第七版（一八五七年）と版を重ねている。

(5) 以降の統計資料は、野口芳子『グリム童話と魔女—魔女裁判とジェンダーの視点から』、勁草書房（二〇〇二年）によるものである。

(6) 『グリム童話』の原書では、「お菓子の家」ではなく「パンの家」Brothausとなっている。大野寿子「お菓子の家とパンケーキの実る木—グリム童話を考える②」、「東洋通信」第四六巻一号（二〇〇九年）、四—八頁を参照のこと。

(7) 「石の棺おけに片足を突っ込んだほど年をとっている」の意。

—おおの　ひさこ・文学部准教授—